令和4年度

地域経済産業活性化対策費補助金

（被災12市町村における地域のつながり支援事業）

取組事例集

はじめに

本事業は、福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム）の個別訪問活動を経て集められた被災地域の声や要望を基に、経済産業省で平成28年度に設けられた事業です。東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い避難指示等の対象となった福島県田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楢葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯舘村における被災者の人々とのつながり創出を通じ、地域の活性化、さらには産業復興や、まちづくりにも資するような取組を支援することを目的とし、令和4年度「地域経済産業活性化対策費補助金(被災12市町村における地域のつながり支援事業) を実施しています。

震災から12年目を迎えた被災地域で帰還された皆様が、復興やまちづくりに熱い想いを持って取り組んでおり、着実に地域コミュニティの再生に向けて歩みを進めておられます。そして、避難先においても被災者の皆様は人と人との新しい交流やふれあいを通じて、生きがいややりがいの創出につながる取組を続けておられます。
令和4年度において、地域の自治体や関係団体の皆様の協力のもとに取組を行った皆様の一例をこの事例集にまとめさせていただきました。福島県や被災地域のみならず、全国の皆様方にこれらの取組による復興への歩みにご理解を深めていただくとともに、被災された皆様が今後これらの取組を参考に、新たな人々のつながり創出や、さらなるコミュニティ再生へ向けて活動していくための一助となれば幸いです。
最後に、この事例集の作成にあたり、取材や資料のご提供などにご協力いただきました各取組団体の皆様をはじめ多くの関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

令和４年３月
株式会社ジェイアール東日本企画
令和4年度地域経済産業活性化対策費補助金
（被災１２市町村における地域のつながり支援事業）事務局

目　次

被災12市町村における地域のつながり支援事業 事例紹介

01. イルミネーション点灯事業 ―― 2
（対象者：田村市 / 実施地：田村市）

02. 北泉ユニバーサルビーチプロジェクト ―― 3
（対象者：南相馬市／実施地：南相馬市）

03. 地域交流スポーツ大会「MIKANカップ」 ―― 4
（対象者：広野町／実施地：広野町）

04. TUMUGUHI ～心を紡ぐ焚火～ ―― 5
（対象者：川内村／実施地：川内村）

05. 花植えによる共同作業で、町民の交流と地域に彩りを生み出す。 6
（対象者：浪江町／実施地：浪江町）

06. いわきなみえクラフト会 ―― 7
（対象者：浪江町／実施地：いわき市）

07. 令和4年葛尾村盆踊りの開催 ―― 8
（対象者：葛尾村／実施地：葛尾村）

08. 飯舘の子どもたちと作るかぼちゃのランタンワークショップ事業 ― 9
（対象者：飯舘村／実施者：飯舘村）

09. 「ごみエコピクニック」 ―― 10
（対象者：南相馬市、浪江町、飯舘村／実施地：南相馬市）

10. みんな元気に、復興歌謡祭 2022 ―― 11
（対象者：楢葉町、富岡町、川内町／実施地：富岡町）

11. 「地元医療機関との交流事業(講義、花き植栽、除草作業等)と、福島生きかがい/元気教室」 12
（対象者：富岡町、大熊町、双葉町、浪江町／実施地：栃木県）

12. 標葉祭り ―― 13
（対象者：大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村／実施地：大熊町）

13. 被災者同士の交流を深めることと、被災者と地域の方との交流の場とすること 健康な体づくり ―― 14
（対象者：広野町、楢葉町、富岡町、大熊町、浪江町、葛尾村、いわき市／実施地：いわき市）

※掲載している取組については、費用の一部を自己負担している場合があります。

取組団体

里山を元気にする会

代表者 坪井 幸一さん

取組名称

イルミネーション点灯事業

取組の概要

震災以前は、住民同士のつながりがとても良い地域でした。しかし、3年間の避難生活を経て地域に帰還してみると、地域内が暗く、住民間にもなんとなくギクシャクとした空気が漂っていました。「このままではダメだ」と立ち上がった数名で始めたのが、イルミネーションを飾って地域を照らす事業です。地域の本来の明るさを取り戻し、住民同士のつながりを再構築することを目的に事業に取り組みました。

■取組の様子

まず、イルミネーションを飾る高さ12メートル、幅20メートルの架台の制作と周辺の除草作業を行いました。本事業に協力してくれた地域団体が7団体あったため、合同で作業を行い、作業後には会員同士の交流会を開催しました。活動を通して、関係を深めることができました。また、点灯式を告知するチラシとポスターも作成し、地域の集会所などへの配布を行いました。式の当日には約50名が参加しました。イルミネーション会場近くに設けた集会スペースでは、参加した地域住民と準備に協力いただいた団体の方々が楽しい時間を過ごすことができ、新たなつながりを創出することができました。

また、今年度は会員の高齢化に伴い、自分たちの健康維持を目的とした活動にも取り組みました。市の保健課の指導のもと、健康に関する講話を聞き、体操を行う健康教室です。教室では、ボッチャにも挑戦しました。無理なく体を動かしながら皆で楽しむことができるボッチャは、今後も健康維持と住民間の交流を目的に継続していきたいです。

■実施者の声

私たちはこの事業を6年間継続してきました。事業を継続することで、住民同士のつながりが地域の中に生まれ、一時期は失われていた町の明るさを取り戻すことができたと感じています。地域の方、訪れた方に喜んでいただくことができ、会員たちも充実感を感じることができました。課題としては、会員の高齢化により、事業の取りまとめが難しくなりつつあることです。人材の必要性は感じています。

■参加者の声

「事業を通して地域が一丸となり、盛り上がることができました」「一つのことにみんなで集中しているときの、それぞれの顔の輝きがとても良かったです」「市長にも素晴らしい事業であり、素晴らしい地域だと褒めていただけたことが嬉しかったです」

取組団体

海のまちづくり実行委員会

代表者 室原 真二さん

取組名称

北泉ユニバーサルビーチプロジェクト

取組の概要

福島県沿岸部の海は、震災の津波と原発事故の影響により、地域のアイデンティティが失われ、物理的にも精神的にも距離が生まれています。特に、南相馬市北泉海岸はサーフィンの聖地として復興に取り組んでいますが、特定の競技関係者だけでなく、多様な市民に開かれたビーチを目指し、ベビーカーや高齢者、障害のある方々にも海に足を運んでもらえるよう、福島県で初となるユニバーサルビーチイベントを企画しました。

■取組の様子

イベント前に北泉海浜総合公園で12年ぶりに開催された「サマーフェスタin北泉」に併せて広報ブースを出展し、ユニバーサルビーチ体験イベントの告知とバリアフリー化の取り組みについて説明をしました。体験イベントでは、安心・安全に運営できるようにメンバーが座学研修を行い、専門家から用具の使用方法や留意事項について学びました。

ユニバーサルビーチ体験イベントでは、市民の有志や関係者で協力し合いながら、海岸の堤防スロープから波打ち際まで伸びるビーチマットを設置しました。さらに、車椅子での移動や水陸両用車椅子を用いての入水体験を実施しました。砂浜上は、ベビーカーの移動も困難で車輪が砂に埋もれてしまいますが、専用のビーチマットを敷くと非常にスムーズに移動できることに、初体験の来場者全員に驚きと感動を与えることができました。

福島県初のユニバーサルビーチとしての周知を目指し、県内外の方との交流拠点となるよう取組を続けていていきたいです。

■実施者の声

イベントには、約150名の方が訪れ、多様な来場者に向けて取組の説明を行うことができました。これまで海に来たくても来られなかった方や、なんらかの障壁があって砂浜まで降り立つことができなかった方々の可能性が広がり、イキイキとした表情を見ることができました。今後も海を身近に感じていただく機会を創出し、誰にでも優しいユニバーサルビーチを目指して、あらゆる人と福島の海をつなげる創造的復興に貢献していきます。

■参加者の声

「車椅子で海に来ることは諦めていたました。ビーチマットがあれば可能。常にあってほしいです」「ベビーカーに乗せたまま、こんなに簡単に波打ち際まで進むことができて感動しました」「堤防から海を眺めるしかなかった高齢者でも、波の音を近くで聞いたり水に足をつけたりできます」

取組団体

NPO法人広野みかんクラブ

代表者 鈴木 正範さん

取組名称

地域交流スポーツ大会「MIKANカップ」

取組の概要

広野町では、震災で町全体が避難区域となったことでコミュニティが失われてしまいました。スポーツ大会は、この失われたコミュニティをスポーツによって再形成すべく、避難解除後の2012年より実施しています。地域住民同士の交流や広野町の現状を伝える情報発信の機会となることを期待するとともに、11年目となる今年度についても、健康維持促進、生きがいのある社会づくり、スポーツ振興を図ることを目的に実施しました。

■取組の様子

取組では、広野町内にある各体育施設を利用して、スポーツ大会を行いました。参加者は町民や近隣他町村民、帰省者などを中心に多世代から幅広く募集しました。参加者同士がスポーツを通じて、世代や地域を超えた交流を図ることを目的に実施しました。

9月から12月にかけて、バレーボール、ソフトボール、フットサル、バトミントン、陸上の5種類のスポーツ大会を開催しました。当日は、小中学生から高齢者まで、述べ約300名の方が広野町に集い、地域住民の交流の機会を創出することができました。

開催時期は新型コロナウイルス感染症の影響もありましたが、参加者同士はスポーツによる交流を積極的に行い、切磋琢磨し合いました。コートの外では、震災の影響で離れていた旧友との久しぶりの再会に、喜びあう姿などを見受けることもできました。

また、音響や実況中継を行うことで、参加者以外の観覧者にも楽しんでもらう工夫をしました。多くの来場者にとっても楽しい時間を提供することができました。

■実施者の声

地域住民同士の交流の場を設けることができました。震災後に新設された県立ふたば未来学園高等学校の生徒も参加し、地域住民との交流を持つ良いきっかけになりました。また、現在は町外などに住んでいる方に対する帰省のきっかけにもなりました。

新型コロナウイルス感染症の影響で、今年度は規模を縮小しての実施となりましたが、引き続き感染対策を行いながら、多くの方々に参加していただける大会にしていきます。

■参加者の声

「久しぶりに友人と再会することができました」「日ごろ接点のない高校生と交流することができました」「この大会に参加できることを楽しみにしています」「広野町がスポーツでもっと盛り上がってほしいです」「年に1回だけでなく、2回3回と実施してほしいです」

取組団体

一般社団法人 かわうちラボ

代表者 遠藤 清輝さん

取組名称

TUMUGUHI ~心を紡ぐ焚火~

取組の概要

川内村は震災の影響で全村避難を余儀なくされ、かつての地域コミュニティが失われつつあります。しかし、村を愛し帰還された方や、村に魅力を感じ移住されてきた方、村に興味を持ってくださっている方もたくさんいます。

そこで、村の大自然を活かしたキャンプイベントを実施しました。キャンドル制作や焚火など、参加者全員で癒しの空間を作ることで、村の明るい未来を紡ぐための新たなコミュニティ形成を図ることを目指しました。

■取組の様子

釣りやキャンプを楽しめる大自然に囲まれた川内村の観光スポット「いわなの郷」に交流の場を設けました。参加者に年齢や性別の制限はなく、川内村に帰還された方や移住してきた方、興味がある方を募りました。

テント設営や薪割りなどの共同作業をしてもらいながら会話をする機会を設けたことで、参加者同士はすぐに打ち解けることができました。準備は終始和やかな雰囲気で行われました。親子で参加した方を中心に、焚火を囲みながら「川内村での暮らし」や「移住」をテーマに川内村の魅力を語り合いました。

夜には参加者自身で作ったキャンドルに、「つながり」をイメージしたリレー形式で火を灯しました。普段の生活ではなかなか経験することのない幻想的な空間の中で、子供から大人までゆったりとした時間を過ごすことができました。

参加者はキャンプを通じて川内村の魅力を体感することができ、地域への愛着を形成するとともに、参加者同士のコミュニティを形成することができました。

■実施者の声

このイベントでなければ出会うことのなかった方々が川内村で出会い、同じ時間を過ごしたことで、新たなつながりを生むことができました。今後も、一人一人の接点を大切にしたイベントを実施していきます。人との距離が少し遠く感じるようになってしまった今の世の中だからこそ、実際に会って、話して、伝えることを大切にし、糸を紡ぐように人と人とをつなげられるような場を増やしていきます。

■参加者の声

「川内村の持つ癒しとパワーは、焚火に似ているなと思いました」「いろんなことを話して笑って、人に会える喜びを感じました」「人とのつながりを感じた1日でした」「知らない人同士でも焚火を囲めば自然と打ち解けてしまう焚火マジックを実感しました」

取組団体

なみえ上ノ原 笑顔のなる木

代表者 佐藤 秀雄さん

取組名称

花植えによる共同作業で、町民の交流と地域に彩りを生み出す。

取組の概要

浪江町は震災の影響で広域避難を余儀なくされました。今回取組を行った上ノ原地域は、戦後荒れた土地を開墾して開拓された地域であり、住民のつながりが強い地域でした。しかし、震災によってつながりは失われてしまいました。本取組では、解体後の住宅跡にプランターを並べ、花を植えることで失われたつながりを取り戻すことを目的に実施しました。また、美しい花で町を明るくすることも目指しました。

■取組の様子

本取組では上ノ原行政区内の家屋解体後の住宅跡地や、共有花壇、主要道路の歩道などにプランターを並べて、季節の花を植えました。使用したプランターの数は、280個で、花の苗はマリーゴールド、ペンタス、インパチェンスを840ポット植えました。花植えには、震災後に帰還した町民や避難を継続している町民などが集まりました。

町中に花を植えることで、震災で変わってしまった地域に、再び彩りと明るさを取り戻し、地域の方々の気持ちも、明るくすることができました。また、花を植えながら、普段は離れて暮らす町民・元町民が再会し、久しぶりに交流することができました。

花を植えながらの交流はコミュニケーションを円滑にし、滞りがちだったそれぞれの情報交換も積極的に行われました。休憩中には、お茶とお菓子を食べながら会話も弾み、終始楽しい雰囲気で花植えをすることができました。参加同士、震災前の地域の絆を改めて感じることができました。

■実施者の声

毎年2回の花植えで行政区内が明るくなったと思います。11月の花植えの時には交流会も行い、住民同士がさらにつながりを形成する、和やかな雰囲気の場となりました。この取組は令和元年より実施しています。参加者には高齢者が多く、作業にも少し負担はありますが、今後も活動を継続し、地域を震災前の明るい様子に変えていきたいです。

■参加者の声

「やはり花は綺麗ですし、心を落ち着かせてくれます」「地域住民が再開する大切な機会になっています。花植えはもちろん交流の時間が楽しみでした」「食事をしながら話しをする事で、震災前の明るい地域に少しでも戻るのではないでしょうか」

取組団体

いわきなみえクラフト会

代表者 田村 栄子さん

取組名称

いわきなみえクラフト会

取組の概要

震災後、浪江町からいわき市に避難し生活をしていましたが、当初は地域の方との交流も少なく、寂しい生活を送っていました。しかし、市内に町民が集まる場所が開設されたため、町民が集まって、浪江弁で楽しく、気兼ねなく交流できる機会をつくろうと思いました。そこで、町民同士が絆を深め、情報交換をすることを目的に、クラフトテープを使って気軽に作品作りができる会を実施しました。

■取組の様子

浪江町いわき出張所隣に私たち町民が利用できるなみえ交流館があります。この場所を利用して、月に2回、講師を招いてクラフトテープによる作品作りを行っています。活動は9年目となり、今では、生徒の技術も向上し、素晴らしい作品を作ることができるようになりました。また、この会を通じて町民同士が絆を取り戻すことができ、作品作りは生きがいにもなっています。さらに、当初は避難してきた浪江町民による会でしたが、現在では、いわき市民の方々も多数参加されています。作品づくりを通じて、多くの人と交流を図りながら、互いに情報交換をし、次の活動につなげていくことができています。

また、今年度は浪江町にある道の駅なみえや、浪江町地域スポーツセンターで開催される十日市祭、なみえ交流館での館内展示について依頼を受け、会員の作品を多数展示しました。会員が心を込め制作した作品には多くの方から賛辞をいただくことができ、会員のやりがいを創出する機会となりました。

■実施者の声

これまで当会は会員同士が助け合いながら、いつも和気あいあいと楽しく活動してきました。9年目を迎え、会員の技術も向上しました。何よりも浪江町民の絆を取り戻すことができました。今後も、日々に感謝しながら、会員のみなさんの生きがいづくりに貢献するために、故郷を想いながら活動を続けていきます。

■参加者の声

「今では月二回の教室が待ち遠しいです。これからも自分の生きがいです」「次々と作品が完成するのが嬉しいです。皆さんとの活動は生きる励みです」「いわき市民として快く教室に入れていただき感謝しています。町民の温かい気持ちと作品制作に喜びを感じながら頑張ります」

取組団体

葛尾村盆踊り実行委員会

代表者 猪狩 智裕さん

取組名称

令和4年葛尾村盆踊りの開催

取組の概要

葛尾村盆踊りは、震災の影響により実施できずにいた盆踊りを、村民の希望により、地区合同で再開することになった行事です。村民を始め、村に関わる全ての方にとって、ご先祖様を供養する場であり、今も避難生活を続ける方にとっては、年に1度みんなと顔を合わせ、再会の喜びを分かち合う場です。委員会、協力団体、参加者が一緒に葛尾村盆踊りを作り上げることで、心のつながりや一体感を生み、生きがいややりがいの創出につなげることを目的としました。

■取組の様子

令和4年8月に、「葛尾村復興交流館あぜりあ」の駐車場でお祭りを開催しました。やぐらを囲んで踊る盆踊りに加え、会場内には村民による屋台、郡山女子大学・同短期大学部による村名産品を活用したアレンジメニュー、日大の地域連携活動研究会（RISM）による、子供向けの露店などが出店しました。このほかに、子供が楽しめるプログラムや参加者向けの抽選会なども行いました。

開催にあたっては、委員会メンバーが打ち合わせを重ね、チラシの作成や委員会のSNSアカウントを活用した発信、関係者への招待状発送などによる周知を行いました。

会場設営は、委員会と有志スタッフによる協力体制のもと、お互いに声を掛け合いながら和やかに進めることができました。お客様のご理解とご協力を得ながら運営することができました。村民にとっては、地域とのつながりを維持する上で欠かすことのできない行事です。次年度以降も、皆で協力し合いながら開催を継続していきます。

■実施者の声

3年ぶりにコロナの影響が残る中での開催でしたが、参加者同士が再会の喜びを分かち合い、心のつながりや一体感を醸成することができました。委員会の体制を刷新して初の開催で、子供が楽しめるように考えた取組も成功し、今後の実施体制や方向性が確立できました。今後は、盆踊りが参加者によって作り上げられるような仕組みづくりを行いながら、会を継続していきたいです。

■参加者の声

「スタッフの方々のおもてなし精神が感じられるお祭りでした」「子供が楽しむ姿を見て、また来年も来たいと思いました」「葛尾村が今後も葛尾村であり続けるために、必要不可欠な行事だと感じました」

取組団体

VGハーベスト

代表者 荒川 厚子さん

取組名称

飯舘の子どもたちと作る かぼちゃのランタンワークショップ事業

取組の概要

これまで飯舘村では行政が行う秋祭りのために、職員有志の方が、飯舘村のかぼちゃ農家の方にランタン専用のかぼちゃ栽培をお願いし、ジャックオーランタンを作成して来ました。今年度は、私たちがその意思を受け継ぎ、村内でランタン制作ワークショップを実施しました。震災以降希薄になっていた住民同士の世代を越えたつながり創出を目的としました。

■取組の様子

当日は、村民の方々や子供たちが、色とりどりのハロウィーンの衣装を身に纏って、旧臼石小学校の多目的ホールに集まりました。このホールは、使われていなかった小学校を村民が交流スペースとして活用できるようにしたものです。村の方々にも馴染みのある場所を会場としたことで、参加者はなつかしさと共に、復興の兆しを感じることができました。

ワークショップには、子供を中心に大人も多く参加し、それぞれが思い思いにかぼちゃのランタンをデザインしていました。世代を問わず、ハロウィーンのイベントを楽しめる機会となりました。

震災以降は集まる機会も減り、さらに新型コロナウイルス感染症の影響もあったため、子供が思い切り遊べる機会が少ないという課題がありました。しかし、ワークショップを通じて、はじめて会った子供同士も仲良くなり、制作後には旧小学校の外の広場で走り回って遊んでいました。世代や地域を越えた、村民同士の豊かなつながりを創出することができました。

■実施者の声

役場職員のアイディアからはじまったイベントが当団体に受け継がれ、笑顔あふれるイベントとして今回開催できたことは、人（役場職員）と人（村民団体）のつながりの結実です。

次年度以降は、福島市や南相馬市などへ避難している飯舘村民が集まりやすい場所での開催も検討します。ハロウィーンイベントだけでなく、離れ離れになっている村民同士をつなぐイベントを、今後も開催していきます。

■参加者の声

「福島市から参加しました。子供たちも前日から、仮装とイベントを楽しみにしていました」「子供が参加後にお友達ができたと喜んでいました」「たくさん子供たちの声が、飯舘村中に響き渡るくらい増えるといいなと思いました」

取組団体

ごみエコピクニック実行委員会

代表者 岩橋 光善さん

取組名称

「ごみエコピクニック」

取組の概要

15年来続けて来たごみエコピクニックは、東日本大震災の影響で6年間中止を余儀なくされていました。これまで、ごみ減量の啓もう・啓発活動を行政主導で行なって来ましたが、なかなかルールは浸透せず、廃棄物が増大していました。こうした背景から、市民参加型ごみエコピクニックの活動再開の声が、市民有志とごみエコピクニック実行委員会から上がり、本取組において、「ごみのないまちづくり」の理念を実践することになりました。

■取組の様子

8月にごみエコピクニック実行委員会を設立し、当日まで会議を5回開催しました。会議ではピクニックの企画を立案し、役割分担と現場状況の把握を行なったほか、取組周知のためのチラシ作成を行いました。

11月6日に県立東ヶ丘公園で市民参加型エコ活動「ごみエコピクニック」を5コースに分けて実施しました。市民の方に気軽に参加していただくことができ、新型コロナウイルス感染症の影響で引きこもりがちになっていた皆さんが、外に出るきっかけにもなりました。当日は好天に恵まれ、広大な公園でごみを拾いながら、紅葉を楽しむことできました。参加者は106名で、若い世代や家族連れが多く参加しました。これまでの活動では高齢者が多い傾向にありましたが、若い世代でのゴミやエコロジーに関する意識の変化を感じることができました。取組は同月11日に福島民報社で紹介されました。実行委員会での円滑なコミュニケーションも会を成功に導く要因となりました。

■実施者の声

私たちの活動はごみ減量と資源化ですが、参加者の多くがすでにごみ減量を推進していることが分かりました。行政と共にこうした輪を広げていきたいと考えています。また、SDGsを意識していませんでしたが、「住み続けられるまちづくり」「陸の豊かさも守ろう」「パートナーシップで目的を達成しよう」「つくる責任、つかう責任」については結果的に効果を得ることができました。

■参加者の声

「紅葉が美しく、広い公園を散策しながらごみを拾うことが子供に良い体験となりました」「南相馬市に、これほど行き届いた自然公園があることを知りました」「改めて、南相馬市の廃棄物が他市町村より多いことを知り、市民一人ひとりの意識が大切だと感じました」

取組団体

ハナミズキの会

代表者 猪狩 とみ子さん

取組名称

みんな元気に、復興歌謡祭 2022

取組の概要

震災前に富岡町で歌のレッスン教室に通っていた町民が中心となり「復興歌謡祭」を企画しました。歌うことを趣味・生きがいにしていた町民がステージに立ち、浜通りに帰還された町民が観客となり、町民による町民のため歌謡祭を開催することで、この地域で生まれ育ったことや、帰還できたことの喜びを参加者全員で共に分かち合い、震災前の賑わいを回復することを目的に取組を実施しました。

■取組の様子

歌謡祭は富岡町の文化交流センター「学びの森」大ホールで開催しました。参加者は震災の影響で一時は避難を余儀なくされましたが、現在は地元に戻ってきた地域住民です。また、富岡町が共催し、福島民報社、民友新聞、福島中央テレビが後援するなど、地元企業の応援を受けることもできました。

歌謡祭の出演者は総勢50名で、観客席は午前、午後ともに250席がほぼ満席となりました。回収したチケットは延べ270枚でした。

双葉郡内からは30組が出演し、懐かしさあふれる歌謡曲を次々と歌い上げました。また、ステージには、町にゆかりのある団体も友情出演しました。歌謡曲の著名人もゲストとして登場しステージを盛り上げました。当日は誰もが歌い、踊り、笑い、手を叩くなどし、ステージと観客が一体となる活気に満ちた時間を過ごす事ができました。5時間に渡るステージの最後は、会場全員で合唱し、参加者は復興に向け、みんなが元気になれる地域のつながりを感じることができました。

■実施者の声

会場には富岡町、楢葉町を中心に、双葉郡の各町や県外など幅広いエリアからの参加がありました。客席は終日満席で、参加者からは「来年も開催してほしい」という声が聞こえてきています。多くの方に喜んで頂けるものとなりました。歌謡祭を通じて出演者も観客も一体となることができ、震災前の地域のつながりを再確認する機会を創出することができました。

■参加者の声

「初めて大ホールで歌うことができた感動は、一生の思い出になりました」「震災前からの知己の仲間たちがステージで生き生きと歌う姿を見て、感動しました。次回は私もステージで歌ってみたいと思い、楽しみが増えました。」「次年度の開催を待ち望んでいます」

取組団体

「ふくしまあじさい会」

代表者 安倍 一さん

取組名称

「地元医療機関との交流事業（講義、花き植栽、除草作業等）と、福島生きがい/元気教室」

取組の概要

震災から12年が経ち、各地域の避難者の集いは、高齢化、体調不良、運転免許証返納などで参加者が減少し、以前のような活気を感じられなくなって来ました。当会も例外ではありませんが、参加者は月に一度の集会を心待ちにし、生きがいとしている方も少なくありません。そこで、今年度は「食と健康」をテーマに会を開きました。講師も「身近な同郷の方」とし、地域で生業を持たれている方や、資格を持っている方を選任しました。

■取組の様子

8月から12月は下野市の自治医大子ども医療センター内で「花壇植栽整備」を実施しました。不足していた肥料や花きを追加し、景観を整備しました。関係者や子供たちに喜ばれたことは、会員のやりがいにつながっています。9月の「クラフト工芸教室」では、老化予防を目的に、手先を使い、肩掛けのショルダーバッグを制作しました。参加者は作品作りに没頭し、できあがりにとても満足した様子でした。10月にはとちぎボランティアネットと協働で、「孫に伝える原発避難のこと」として講演会を実施しました。また、当会は女性会員が多いため、美と健康に着目した「お肌マッサージ教室」や1月に「痛み、疲れが気になる健康体操教室」も開催しました。どちらも盛況で、参加者は楽しみつつも真剣にマッサージや体操を行っていました。また11月の「国産牛ステーキと幻のしいたけ（トムトム）ステーキを楽しむ料理教室」や12月の「南相馬の前田豚とんかつと餅を楽しむ料理教室」では、終始わきあいあいとした雰囲気で、実施することができました。どの会も30名程度が参加し、新たなつながりを感じる機会を創出することができました。

■実施者の声

それぞれの会を通じて地域の方や周辺施設などとの関係づくりを継続的に行っていくことが、結果的に避難者にとってのより良い環境づくりにつながると考えています。そのためには、一人一人が人や地域とつながっている意識を持ち、避難者で固まりすぎずに、感謝を持って地域に関わっていくことが大切です。「震災への思い」も語り続けていきながら、今後も取組を継続させていきます。

■参加者の声

「大きな調理場を狭く感じるほど、多くの参加者がいました。皆で調理をし、最後には『良い年を』と皆で誓いあうこともできました」「体操教室の二人一組でのゆがみチェックや、相互で確認試合はとてもよかった、仲間と一緒に参加する喜びがありました」

取組団体

一般社団法人浪江青年会議所

代表者 杉本 誠さん

取組名称

標葉祭り

取組の概要

標葉地域（浪江町、双葉町、大熊町、葛尾村）は、自然や食・伝統文化などの魅力を有しています。しかし、震災後は避難指示が継続し、避難指示の解除後にも人口が戻らないといった課題を抱えています。そのため、地域が持つこれらの魅力を失ってしまう恐れがあります。次世代の子供たちに向けて標葉地域の魅了や伝統文化を伝え、地域への愛着や誇りを醸成することを目的として、標葉祭りを開催しました。

■取組の様子

標葉祭りは大熊町にある、大熊交流ゾーンで開催しました。避難指示解除がされて間もない地域での開催ということで不安もありましたが、来場者は当初の目標であった1500人を越え、多く方々に標葉地域の魅了を発信することができました。

飲食店ブースには、なみえ焼そばや大熊町のいちごの生産者であるネクサスファームが出展し、標葉地域の食の魅了を存分に発信しました。また、ステージイベントには、標葉地域に関わりのあるアーティストや、地域で活躍する各種団体が参加し、会場を盛り上げました。

さらに、認定こども園と義務教育学校、預かり保育、学童保育を一体にした施設である、大熊町学び舎夢の森の先生や児童には、ブースの出展とステージイベントへ参加してもらいました。会場には子供たちの笑い声が響き、和やかな雰囲気でお祭りを開催することができました。

■実施者の声

当日は多くの方に参加していただくことができ、次世代を担う子供たちにも標葉地域の食や文化はもちろん、地域の方々のつながりを感じてもらえる機会になりました。会場にテントを立ててしまうと、想定より場内が狭くなってしまうことから、次回は広い会場を選定したいです。今後もお祭りを通じて、標葉地域の魅了と伝統文化の発信を行い、交流人口の増加や伝統文化の継承に寄与できるよう活動していきます。

■参加者の声

「久しぶりに多くの人と交流することができて、とても楽しかったです。活動を応援しています」「若い人や子供の姿がたくさんあって、とても嬉しいお祭りでした」「会場全体の盛り上がり、パワーを感じることができ感動しました。次回も楽しみです」

取組団体

ダイアナRIKO愛好会

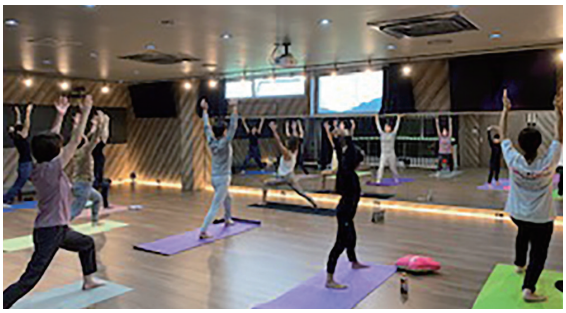
代表者 生沼 理栄子さん

取組名称

被災者同士の交流を深めることと、被災者と地域の方との交流の場とすること健康な体づくり

取組の概要

それまで交流のあった地域住民が、震災をきっかけにバラバラになってしまい、近年では交流を持つ機会が失われていました。そこで、双葉郡から避難している方が、元の地域住民とコミュニケーションを取る機会を設けるとともに、いわき市の方とも交流が持てる場を作ることを目的に取組を行いました。健康の三大柱は、「栄養」「運動」「休養」です。そのため、料理教室、ヨガ教室、フラワーアレンジメント教室を実施しました。



■取組の様子

料理教室では「9品目のお料理教室」を実施しました。バランスの良い食事について学んだ後に、地元の食材を使って実際に調理を行いました。調理後には試食会を開催し、終始和やかな雰囲気で交流することができました。

レンタルスタジオを借りたヨガ教室では、ストレッチを行いながら、体幹を鍛える運動を行いました。きつい運動もありましたが、引きこもりがちだった心と体を、参加者が一緒にほぐすことができました。12月には顔ヨガも実施し、表情筋のトレーニングを行うなどし、多くの笑顔を見ることができました。

フラワーアレンジメント教室では、押し花を使った壁掛けもできる置き時計を制作しました。どの参加者も夢中で作業に取り組み、予定よりも時間をオーバーしてしまいましたが、楽しいひとときを過ごすことができました。同じ花材でもそれぞれの個性があり、完成後は互いの作品を鑑賞しながら、声をかけ合っていました。

教室を通じて、充実した交流の機会を設けることができました。

■実施者の声

それぞれの教室を開催する上で、場所や設備、材料、講師などの確保に工夫が必要であることが分かりました。しかし、どの教室でも参加者は普段とは異なる経験をすることができ、とても充実した様子を見受けることができました。参加者同士の交流も活発に行われ、当初の目的は果たせました。活動の継続を希望する声を多くいただけているので、今後も地域の皆さんのために取り組んでいきます。

■参加者の声

「皆さんと一緒に健康的で美味しいものを一緒に試食することができて楽しかったです」「運動不足を解消することができ、学んだことを家でも試したらよく眠れるようになりました」「作品作りに熱中しました。オリジナルのものができて嬉しいです」